

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號六第 卷二十第

行發日一月六年十正大

論叢

中世都市の發達

文學博士 三浦 周行

社會的法的經濟學の考察

文學博士 米田庄太郎

純理上より見たる財産重課の理由

法學博士 神戶 正雄

戰後獨逸の社會主義運動

法學博士 河田 嗣郎

時論

増俸の研究

法學博士 小川郷太郎

說苑

我國農産物生産調査に就いて

法學博士 高岡 熊雄

舊岩國藩の製紙原料保護政策

經濟學士 吉川 元光

所得と勞賃

經濟學士 堀 經夫

雜錄

史的唯物論略解

法學博士 河上 肇

Zimmermannの政治測量

法學博士 財部 靜治

勞働組合主義變轉の傾向

法學博士 河田 嗣郎

附錄

本誌第十二卷總目錄

戦後獨逸の社會主義運動 (二)

河田 嗣 郎

三 非國家主義的傾向

獨逸社會民主黨は當初からして頗る國家主義的傾向を帯びて居たことは、前節に之を明かにした通りだが、然し又前述の如くそれと相并むで、又はそれと相錯綜して、非國家主義的傾向の存在したことも、掩ひ難き所とする。仍て此所に又少しく此の方面に就いて窺つて見やう。

獨逸の社會民主黨に於ける非國家主義的傾向は、遠く之を前世紀の三、四十年代に遡つて尋ねることが出来る。即ち當時西歐諸地方を遍歴せる手工業の助手職人連中は、當時少からず歐洲の思想界を感動せしめたる英佛のエートピア社會主義者就中特にロバート、オウイン Robert Owen、ヤール、フリエー Charles Fourier、カベール Cabet、サン、シモン Saint Simon 等の新思想に接觸する機會を有した。彼等は元來其の母國を捨て、腕一本で以て到る所青山在りといふ連中であつたが爲めに、そして又祖國の窮窟なる制度組織に苦められ、佛蘭西や瑞西などの自由なる空氣に蘇生の思を爲す連中だつたが爲めに、少からず此の超國家的なる新思想に動かされ、之に捕はれて

しまつたのである。殊に當時産業界は所謂産業革命の後を承けたばかりの状態で、労働者は一般的にたゞ新興企業精神を養ふべき食餌に供せらるゝ外、未だ何等結社の權を有せず、同盟罷業權を有せず、言論の自由も選舉權も悉く彼等には拒まれて居た。又實物勞賃に依る低き労働報酬と、女子や少年者の労働と、一般的なる長時間の労働とは、時の労働者をして眞實に雇主の利益の搾取手段たらしめたる次第であつた。

斯かる境遇に在る人々の間に、現制度に對する反感と從て其の制度の據て立てる國家組織に對する反抗心との養はるゝは、謂はゞ當然のこととせなければならぬ。此の反國家的氣風は時の労働者階級の中より生れ出でたるウイルヘルム、グアイトリング Wilhelm Weitling の筆に依て示さるゝこととなつた。彼は謂ふやう、社會が不公平の上に生存する限り、又一の國民が主人と婢僕とに依て出來上つて居る限りは、其の支配が何者に依て行はれやうとも、結局同じことである。ヒンツが支配しやうとクンツが支配しやうと、ナポレオンたるとフリードリツヒ、ウイルヘルムたるとニコラスたるも、何の選ぶ所もない。何人の支配下に在つても労働者は犬馬の如く驅使せらるゝのみである。今や吾等は祖國を有たぬ。だゞ社會が之を組織する人々に對して同一様に注意するやうになつたら、其時甫めて吾等は祖國を有することになるであらうと。

労働者の國家に對する斯かる態度は、更に一八四七年に公にされたる『共產宣言』に依て明確に

表示された。共產宣言の中には、勞働者は祖國を有せず。人は彼等の元來之を所有せざる物を何物をも彼等より取去る能はず。無産者は鐵鎖の外、失ふべき何物をも有せざる也と記されてある。而して終に一八四八年は來た。一大動亂の後に暗膽たる五十年代は來り、多くの社會主義者は或は瑞西に或は佛蘭西に或は英吉利に亡命して、其所に却つて比較的自由なる天地を見出し得たのである。曰くカールシュエルツ Karl Schurz 曰くカール、マルクス Karl Marx 曰くフリードリッヒ、エンゲルス Friedrich Engels 曰くフェルナナンド、フライリヒラート Ferdinand Freiligrath 曰くウイルヘルム、リーブクネヒト Wilhelm Liebknecht 總て此等の人々は其の母國たる獨逸が彼等に拒むだ所のものを、却つて其の亡命地に於て與へらるゝを得た者であつて、彼等の中より、時あつて大いに獨逸の國家に對して不信を表白する聲を聞き、又明かに之に反抗する敵對的態度を見ることあるは、之れ固より當然至極のことに屬する。

右に掲ぐる人々の中エンゲルスやリーブクネヒトの如きは、前に之を明かにしたやうに、元來非國家主義に徹底せる者ではなく、寧ろ大いに國家主義的傾向に富むで居ただけれども、其の裏心に於て獨逸其ものを呪ふ心はなくとも、其の亡命中獨逸の國情に憤り、大いなる反抗の火焰を燃やすことの避くべからざりしは、又之を認めねばならぬ。而してリーブクネヒトの如きは獨逸社會民主黨の指導者たる地位に居ること頗る長かりしだけ、その感化が社會民主黨一般に及ぶ

所の甚だ大なりしことは、之を見逃してならぬ所に屬する。

一八四八年の事件以後、大いなる反動期が之に續けると同様、一八七〇年代に於て、獨逸帝國の建設の行はるゝ時期に當つては、國內に於ける國家主義思想は頗る高潮を呈することゝなつたから、其間に在つて非國家主義的態度を持する者に對して、嚴峻なる抑壓の行はれたるは想像に餘りある所とする。十餘の新聞と千四百の定期及び不定期刊行物は禁止せられ、多くの社會主義者は其の足底より獨逸の塵を拂つて瑞西や英吉利や米國へ逃亡せなければならなかつた。此の時期に當つては、此等非國家主義者の獨逸國家に對する咀呪は實に白熱を呈するに至つた。而して此の反抗熱を冷却せしむる爲めには、國家の側に於てたゞ大いなる忍耐が必要であつた。然るに國家は此の忍耐を持ち得ないで、一舉に國內より非國家的社會主義者を蕩掃せんと企てたが爲めに、却つて益々非國家主義熱を昂奮せしむることゝなつてしまつた。

斯くてフリードリッヒ、ニーチエ Friedrich Nietzsche の超人論が表はれて、其の非國家的思想が輝き渡る天才の光を以て宣傳せらるゝに至つてよりは、其の思想は幾多の巨流細流となつて國民の間に流れ涉り、然かも當年の政策が地面を十分に培ひ置きたる爲めに、時の反動的政策の爲めに懊まされつゝありし労働者の如きは、糾然として之に向ふ有様を呈するに至つた。

而してこの非國家的傾向は二十世紀に入りてよりは、又多少科學的系體として編み上げられ、特

にローザ、リユクサンブル Rosa Luxemburg だとかカール、ラデーク Karl Radek だとかアントン、バンクーク Anton Pannekoek などの外國出の人々に依つて、最も熱烈に鼓吹せらるゝこととなり、終に大戰を機會として、獨逸社會民主黨内に於ける國家主義的傾向と非國家主義的傾向とは袂を振つて相分れ、各々其の行くべき道を選び行くの外はなきことゝなつた。而して戰時中特に猛烈に非國家主義的傾向が、右等の外國人―主として露西亞及び波蘭出身の人々に依て煽り立てらるゝを見たる人々は、かゝる非國家的傾向は、元來東方產のものであつて、獨逸自身の上に發芽せるものではないと考へんとして居るやうである。然し事實は決してそうでなく、獨逸の社會主義者自身の中に國家主義的傾向と相並むで、非國家主義的傾向が早くより存在したることとは、以上の説明によつて明かなる所とする。

四 社會民主黨の分裂

上來之を論示するが如く、獨逸の社會民主黨内部には、本來國家主義的なる傾向と、非國家主義的なる傾向とが、併存駢馳して居た次第で、是は獨り獨逸に於て之を見る所たるのみならず、何れの國の社會主義者の間にも、大體に於て此の區別の存することは、睹易き所に屬する。而して戰前に在つては、先に之を述べたるが如く、獨逸社會民主黨内に於ける國家主義的傾向は、益

益其の地盤を固め、四圍の狀態就中特に緊張せる國際關係は、國家主義的傾向をして、益々氣勢を張らしむるに都合よき事情を呈した。

されば一九一四年開戰當初に當つて、社會民主黨の態度を決すべく開かれたる八月四日の紀念すべき大會に於ては、其黨の全力を以て獨逸國家の防衛の爲めに戦ふこととなつたのである。

それより先き一九一二年に、歐洲戰爭の行はるべき場合に於て國際社會黨の取るべき態度を議せんため、ベルンに大會の開かれたる際にも、其の決議は洵に生まぬるものであつたが、獨逸の社會民主黨内部に於ける大體の氣勢も、飽迄開戰に反對して、國家の運命を賭しても世界平和の爲めに、戰爭を防止するといふ風には、到底なり得なかつたのである。即ち當時社會主義者の内部に於ける狀況を概括すれば、資本主義經濟組織の崩壊と、それに依て生ずべき無階級社會組織に於ける人道の解放とに關する革命的理想は、多數者の頭腦中よりは、殆んど消滅してしまつて居たのである。多數者は戰爭に依つて失ふべきものとしては、自由を縛せる鐵鎖以上に多くのものを持つて居た。各自は戰爭に對して防衛すべき積極的價値に關して、明確なる意識を抱いて居た。そして社會黨も亦共同團體として其の物質的福祉の防衛せざるべからざるものあるを見なければならなかつた。

此の事情の下に於て八月四日のあの決議を見たのは、甚だ當然のことである。

けれども、多數者はともかくとして、少數者の間に在つては、大戦の大動亂あるに拘らず、在來の主張たる階級戦争の教義と革命的社會主義の思想は、依然として保持せられたるを忘れてはならぬ。たゞそれは少數者の懐く所たるが爲めに、社會黨を自身の政策としては働き得なかつたのである。而して此所に實に獨逸社會黨の分裂の原因は宿つて居たのである。

斯くて開戦當初戦場の狀況が獨逸に都合よく進み行く間は、社會民主黨は平靜に進み行くを得たが、其年の十月頃よりは、少數非戦派の氣勢は少しづつ揚がり來り、十二月に至つては小シロブクネヒトは戦時公債に對して議會に於て協賛を拒むた。其後戦ひの長引くに連れて、社會黨の歩調は段々怪しくなつて來た。而して戦争といふ事實が當初階級戦争主義を以て黨の政策と爲すことを全然不可能に歸せしめたりとせば、同じく又戦争に依て齎されたる人心の動搖と經濟生活の不安とは、茲に又新たに一般民衆の間に、革命的社會主義思想の浸漸するを得べき間隙を造り出すことゝなつた。

一九一五年の末に至つては、少數非戦派の態度は愈々決定的となり、公々然と戦争の禍害を述べ、平和の速に恢復せられざるべからざることが、喝破唱道せらるゝことゝなつた。そして一九〇六年三月にはハーゼー一派の人々は終に社會民主黨より分離して、茲に多年の懸案は、其の解決を見ることゝなつた。同年四月六日彼は議會に演説して曰く、諸國の無産者よ、結合せよ。血

腥き國々に長く望まれたる平和を齎す爲めに結合せよ。斯くて從來たゞ黨人の頭の中に潜みたる革命的社會主義と漸進的社會主義との分別、階級戰爭主義と合法主義との分別、國家主義と非國家主義との分別は、茲に愈々黨派としての外形的分裂として表はるゝことゝなつた。

此の獨逸社會黨内部に於ける革命に對しては、多數派は之に對抗するに足るべき十分なる國家主義的態度を鮮明にして、主義を以て主義を鎮壓するに努むることなく、たゞ黨派としての節制と結合との必要なるを高調するに過ぎなかつた。茲に於てか少數派は驀地に主義に向つて進み、總ての國內に於ける労働者は、經濟上並びに文化上に於ける共通なる利害の爲めに、將來ともに資本主義の搾取と壓制とに對して戦はざるべからず、その爲めに吾等は労働者を以て成れる十分なる戰鬥力ある社會主義的國際團結を再造するの必要ありと揚言しつゝ、遮二無二進み行くこととなつた。然し此の少數派は未だ決して結合されたる一體たるには至らず、その中には比較的穩和なるものと、頗る急進的なるものとが、たゞ階級戰爭といふ旗幟の下に混合集結せる有様であつた。從て此の内部の不統一は種々の機會に於て表面に現はれ來るを免れ得なかつた。

ハーゼーを中心とする穩和なる右黨は、平和問題に關しても、國際的なる平和條件を案出し、國民多衆は各國政府を強要して其の條件の下に平和を締結せしむるに努めざるべからずと爲し、其の平和には戰勝者もなければ戰敗者もなきものたらしめんと欲した。之に對してスバルタクス

及び獨逸國際社會主義者の一團の過激なる左黨は、平和問題に於ても政府の力を藉るを不可とし、外交手段に依る國際的平和條件を認めず、平和はたゞ無産階級の獨立なる民衆行動に依て強制實現せしめられざるべからずと爲した。又右黨は從來の社會民主黨をば内部より革新し、之を以て革命的社會黨として維持せんと欲したるに反して、左黨は從來の社會黨そのものに對立して之を打亡ぼさんと欲した。そしてスバルタクス團はハーゼー團と異り、あらゆる政黨的組織と政黨的官僚制を否認し、政治的活動の重點は之を民衆の獨立行動に置かんとしたのである。

斯く分裂の傾向が著明となつて來て、到底妥協の道なきことが明かとなつて來ては、從來の社會民主黨の多數派は、此等の少數派の行動に對しては、もはや政黨としての統一と節度とを行ひ得べきにあらず、その爲し得べき所はたゞ、分れんとする者をして其の好む所に分れ往かしむるの外はなかつた。

五 獨逸獨立社會黨の立場

大體前節に之を示すやうな事情の下に、終に新たな獨逸獨立社會黨 D. S. P. D. の建設を見るに至つたのであるが、獨逸獨立社會黨は一九一七年四月六―八日のゴータに於ける其の設立協議會に於て、其の政黨としての主義綱領はやはり舊來の獨逸社會黨のそれを認めることとした。

そして一九一九年三月に於ける綱領宣示に於ては、大體彼のエルフルト綱領の主旨に従ふことゝし、又同年十二月の行動綱要に於ては、彼の共產宣言の理想を繰返すことゝした。即ち社會主義的民主制は社會組織の最後の理想として標示せられ、其の組織の下に於ては、各個人の自由なる發展が、總ての人々の最上の幸福と一般的なる調和ある完成とに對する條件を爲すものとせらるる次第である。

而して新社會黨は其の政治上の主義としては階級戦争觀を固執せんとする。即ち搾取者と被搾取者との利害衝突に對する自覺は無産者をして一階級に結合せしめ、此の利害衝突を排除せんとする共同意思は階級戦争を齎さざるを得ずとせられる。然かも勞働階級の解放はたゞ勞働階級自身の仕事である。何故ならば、他の階級は其の階級相互間にたとへ利害の衝突ありとも、何れも生産手段の私有制の地盤の上に立ち、資本主義組織の維持を以て目的と爲すからである。たゞ無産階級のみ平等であつて、他のあらゆる階級は不平等を以て利益とする。たゞ此の特權階級の生存條件が排除せらるゝに依てのみ階級制は取除かれ、無産者に對する資本主の支配は亡滅に歸する。此の大目的が到達せらるゝ迄は、階級戦争は主義として維持せられねばならぬとせらるゝ。次に新社會黨が將來に期待する所のものは、謂ふ迄もなく社會主義組織の社會である。而して此の社會組織に在つては、政治も經濟も共に代議員制 *Rätesystem* に依て行はるべきものとせらる

れる。その代議員制の根本原理は、労働者は經濟の支持者にして、社會の富の生産者たり、又文化の促進者たるが爲めに、同時に又法制と政治との責任ある支持者たらざるべからずといふことに存せせられる。

此の代議員側の組織は、經濟關係を以て社會組織の基礎と爲すといふ考から編み出されたるもので、經濟上の事業經營體を以て、社會を組織する細胞と爲し、その細胞たる各事業體に屬する人々は、代議員の選舉被選舉權を有するものとし、此の選舉被選舉權は、十八歳以上の者たる限りは、男性たるは女性たるを問はず、自己の手又は頭腦の働に依て生活手段を所得し、然かも決して他人の労働力を搾取することなくして、社會に必要な又有用なる労働を行ひつゝある者ならば、何人と雖も一般的に之を享有するものと爲さんとするのである。而して此等勤勞者の一般意思は、代議員制を通じて社會の公の意思となり、之に依て立法行政共に取行はるべきものとする。

代議員制は政治と經濟との二方面に對して働かねばならぬ。從て行政的代議員制と經濟的代議員制とは両立併存すべきであつて、經濟的代議員制は、事業經營代議員と職業的労働代議員とより成り、行政的代議員制は政治的労働代議員に依て造らるゝものとする。即ち各事業經營體は經濟組織の細胞として經營代議員を選出すべきものとし、各經營體は百人を基礎とし其數毎に一名の代議員を出すものと爲す。次に職業的労働代議員及び行政議員は一千名毎に一名とせられる。⁰⁷⁾

總べて右の如きは、新社會黨の主義とし綱領とし方策とする所の概括である。茲には此上立つて之を細説する必要はあるまいが、兎も角新たに生れたる獨逸獨立社會黨は、彼の社會主義本來の主張に依り、社會主義制の實現の爲めに、階級戰爭を主義と奉じて進み、無産者階級の國際的大結合に依り、勞働者の之を支配し管理し得べき經濟組織を造り社會制度を建設せんことを目的と爲すものなること、特に注意すべき所に屬する。從てそは思想に於ては、獨逸本來の社會主義思想を取り、其の本流を繼承せるものと見なければならぬ。

而して彼の國家主義思想に至つては、新社會黨は、元來國際主義に依て立てるものであるから、勿論非國家主義的傾向を取れるものと見なければならぬ。第二國際社會黨は大戰の爆發と共に亡びたが、その亡びたるや、急進的なる理論上の洞見の缺けたるが爲めではなく、たゞ革命的狀況の缺けたるが爲めに外ならぬ。然るに大戰は、此の狀況をは未だ曾て之を見る能はざるほどの分量に於て齎らしたと考へられて居る。此の大いなる機會を捉へて、社會主義の勝利を確實にせんとすることが、即ち新獨逸獨立社會黨の志である。

然らば獨り獨逸獨立社會黨に就いてのみと言はず、廣く國家主義思想の消長を、社會主義的傾向の間に於て窺つて見るとどうであるか。之に對する判斷は人々に依て夥しき相違あり、未だ何れを以て正鵠を得たりとも論定し難い。大戰の爲めに諸國に於ける國家主義思想は大いに復活

し方を増し來れりと見る者は、之を社會主義者の態度に照しても實證するを得べしとする。即ち例へば Jules Guesde の如きは頑固なるマルキシストで非關員主義者として知られ、總べてを支配する彼の大きいなる社會問題の前には、あらゆる國家的問題は頗る意義なきものなりと永年説教せる人であり乍ら、大戰に依る國難の時期に際しては、曾て主義の反逆者と罵れる Viviani 及 Briand と共に關員の列に連つたではないか。又 Sembat や Thomas や Vandervelde は如何。又獨逸の政權も社會主義者の手に握られ、國政は彼等の料理する所ではないか。之れ國家主義の勝利にあらずして何ぞやと主張する。然るに之に反對する者は、露西亞の例を引き、其他諸國に隱顯する傾向を捉へて、非國家主義の大きい優勢となれるを論證せんとして居る。

此の見解の相違に就いて今私は判定を下さんとするものではない。それは本論の目的とする所でないが、然し私は、寧ろこう見るのが正當であるやうに考へる。即ち世界大戰を機會に諸國に於ける國家主義も大いに其の色彩を明瞭にしたが、それと同時に非國家主義の傾向も深く人心に浸み渡れるものあり、兩者共に其の立場を進め、兩者の反照愈々著明となつて、然かも段々妥協の中間地帯が失はれて、接觸すれば即ち火花を散らさなければならぬ情勢が、大いに造り成さるゝに至つたと觀ることである。水は滔々と流れて居る。火は焰々と燃えて來た。何れにしても誤魔化しては行かれぬ世の中となつて來たのである。(完)